

いたわりの21世紀へ —司馬遼太郎 未来への遺言—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

ペンネームは古代中国の悲運の歴史家・司馬遷に由来している。前漢時代の権力者・武帝の怒りを受けて獄中に囚われた司馬遷は挫けることなく全130巻の歴史書『史記』を完成させた。司馬遷に遼に及ばない日本の男子として彼は司馬遼太郎(1923年—1996年)と名乗るようになった。

今年で生誕100年を迎えた司馬の数々の作品があらためて脚光を浴びている。痛快な歴史小説の登場人物に魅せられるビジネスパーソンはあとを絶たず、NHKの大河ドラマの原作となった作品も7作と群を抜いている。独自の視点による歴史観は司馬史観として賛否両論を巻き起こし、後世に少なからぬ影響を及ぼした。

いまも世代を超えて読み継がれる司馬はいかにして国民的作家となったのか。

避難民より戦車を優先

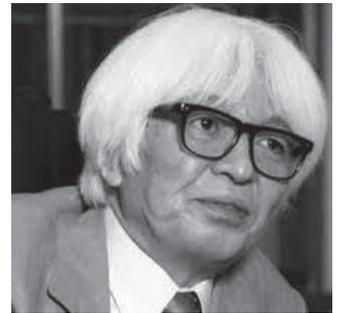
司馬は現在の大阪府大阪市浪速区塩草で薬局を営む中流家庭に生まれた。本名は福田定一。兄が2歳で早逝し、姉と妹と共に育てられた。

大阪市難波塩草尋常小学校(大阪市立塩草立葉小学校)から私立上宮中学校に進み、井伏鱒二の小説を読んで無類の読書好きになる。吉川英治の宮本武蔵全集を本屋で立ち読みし、店主に怒られながらも全巻読破した。その傍ら山登りを好み、大阪周辺の山はほとんど踏破する。

在学中の1939年、第2次世界大戦が勃発し、上宮中学の配属将校から軍事教練を受けるように

なった。読書の時間を奪われた司馬は軍部による強引な中国侵攻に不信感を募らせる。

家計の事情で旧制高校への進学は官立のみと父親に釘を刺され、大阪外国語学校(大阪



司馬遼太郎

大学外国語学部)の蒙古語学科に入学した。ところが語学は嫌いで司馬遷の『史記』などの中国古典やトルストイなどのロシア文学を読み耽った。

戦況は日々悪化し、学徒動員で1943年に兵庫県^{はるか}の戦車第十九連隊に入隊する。操縦訓練では機械に弱く、動作にも遅れが目立ち、同期生のなかでもとびきり操縦が下手だった。司馬は息苦しい軍隊生活に馴染めないまま翌年、中国・満州の戦車第一連隊に配属された。

しかし戦況はますますきびしくなり、本土決戦を準備するために第一連隊は栃木県佐野市に移動する。上陸してくる連合軍をどう迎え撃つのか。大本営の将校が説明に来たとき、司馬は逃げ惑う人々への対応について質問した。本土決戦になれば東京や横浜の人々が北関東や西関東へ逃げようと大八車に家財道具を積んで北上してくる。当時、道路はほとんど舗装されておらず、路幅もせいぜい2車線程度だった。国民は北上し、戦車は南下する。そういう場合にどう対処するのか。司馬を

睨みつけていた将校は昂然と「轢き殺していけ」と言い放った。司馬は避難民の命より戦車を優先する大本営に愕然とする。

明るい明治と暗い昭和

戦車第一連隊での衝撃的な体験は作家としての司馬が誕生する決定的な契機となった。1945年、陸軍少尉として終戦を迎えた司馬は「なんとくだらない戦争をしてきたのか」と思い悩み、敗戦時の自分自身「いわば23歳の自分への手紙を書き送るようにして小説を書いた」と回想している。

産経新聞の大阪本社に勤務しながら書き上げた『ベルシャの幻術師』が講談倶楽部賞を受賞し、司馬遼太郎としての出世作となる。1960年、忍者を主人公にした『梟の城』が直木賞に輝き、産経新聞を退社して作家活動に専念した。

新たに幕末から明治維新に至る激動の時代に光をあてた『竜馬がゆく』と『燃えよ剣』が歴史小説の傑作として反響を呼ぶ。明治維新への司馬の評価は一貫して高く「明治はリアリズムの時代でした。それも透き通った格調の高いリアリズムでした」と述べ、リアリズムを失った昭和と対比した。昭和については随想集『この国のかたち』で「明治の夏目漱石が、もし昭和初年から敗戦までの“日本”に出逢うことがあれば、相手の形相のあまりのちがいに人違いするにちがいない」と愚かな戦争の時代を痛烈に皮肉っている。司馬は『明治という国家』でリアリズムを「肅然とした自己認識」と定義し「これだけが国家を運営する唯一の良心であり、精神なのです」と断言した。だが昭和の戦争に「そういうものは皆目なかった」と苦々しく述懐している。

明るい明治と暗い昭和に象徴される司馬史観は1968年から約4年間にわたって産経新聞に連載した『坂の上の雲』で確立された。「まことに小さな国が、開花期を迎えようとしている」で始まる空前のベストセラーは日露戦争に参戦した秋山好古・真之の軍人兄弟と俳句に新風を吹き込んだ正岡子規という明治の傑物たちを描いている。彼らは坂の上の青空に輝く白い雲を見上げて決然と長い坂道を昇っていく。その一途な生きざまは高度経済成長期の日本と重なり、広く国民に支持され

た。しかし日露戦争の歴史的評価をめぐって司馬史観の妥当性が問われていく。

水を正しく流すように

『坂の上の雲』のあとがきで司馬は「日露戦争そのものは国民の心情においてはたしかに祖国防衛戦争であった」と評価した。だが小説だからといって国民の心情と史実を混同してはならないという批判が歴史学者などから噴出する。たしかに明治政府の富国強兵策には武力による領土拡張の野望が孕まれていた。ただ司馬を昨今の歴史修正主義者と同一視するのはフェアではない。司馬は「ミリタリズムを鼓吹しているように誤解される恐れがある」と『坂の上の雲』の映画化やテレビドラマ化を断りつづけた。

歴史への情熱は衰えず戦国期の『国盗り物語』、江戸後期の『菜の花の沖』、幕末の『世に棲む日日』、明治初期の『翔ぶが如く』などを精力的に執筆する。清朝興隆の時代を題材にした『韃靼疾風録』が最後の小説となり、紀行随筆『街道をゆく』で文明批評を行った。晩年は1932年にモンゴル国境で関東軍とソ連軍が衝突したノモンハン事件の作品化を模索していたという。

腹部大動脈瘤破裂で死去する7年前の1989年、小学6年生の国語教科書に「二十一世紀に生きる君たちへ」という司馬のメッセージが掲載された。

そこで司馬は自分にきびしく、相手にやさしくという自己を確立しなければならないと主張する。「川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己」が科学と技術をよい方向に持っていく。人間は助けあって生きており、助けあう気持ちや行動の根っこは「いたわりという感情」だ。いたわりは他人の痛みを感じることに、またはやさしさと言いかえてもいい。「この根っこの感情が自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえそういう自己をつくっていけば、21世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない」と。

司馬が語りかけたのは子供たちだけではない。21世紀に生きるすべての人々にいたわりという感情を伝えたかったはずだ。それは未来への遺言といってもいいだろう。